

中国の人民元改革は不透明な部分が大きく、米園が満足するかどうかは今後の推移次第だ。ただ、人民元のドル・ペッグ（連動）が外れたことで、東アジア諸国では今後、域内為替レート安定のため、共通のバスケット制を採用するといった改革が中長期的な課題となってくる。

不明点多い発表 変動幅だけ明確

中国人民銀行は七月二十一日午後七時（日本時間午後八時）、人民元の対ドルレート二%の切り上げと、多通貨バスケット価値を参照して変動を許すと、「公告」を発表、人民元改革の第一歩が印された。公告は「中国人民銀行は、國際の批准を経て、人民元

第四に、日々の変動は、まったく自由に任せられるのか、それとも、そもそも上限・下限にぶつからないように介入が行われるのかは、明らかではない。さらに「通貨バスケット」に關しても、バスケットの構成通貨やそのウェイトが発表されていないので、この部分は運用を見てみたいと最終的な判断を下さない。



中国の人民元改革と東アジア 域内為替安定へ前進

最大の障害消える

共通バスケット制が課題

伊藤 隆敏
東京大学教授



円対ユーロ、対香港ドルの四通貨のレートである。しかし、対ドルの終値がそのまま翌日の対ドルの中心レートになるのは、通貨バスケットを参照してはほとんど無い。バスケットを原則に使っている」とする。むしろ終値が想定するバスケットに近い値になるように、市場の終りに介入して元ドルレートを誘導している、というところだ。

「第一に、為替レート制は、ドル・ペッグを前提として、市場の需給に基づき通貨バスケットを参照する管理フロート制に移行する。第二に、毎営業日の取引終了後に決まる「終値」が、翌日の中心レートになる。第三に、二十一日の終値を二%、八・二%（前日比約二%の切り上げ）とする。

元を扱う庄力が強くなり、上（一日の切り上げ）0.3%が毎日達成され、その上限が翌日の中心レートになることが繰り返されるならば、十日で三%（一月約二十%）を操作していかないという報告と同時に、半年間の準備を与えるという条件をうけていた。それまで何もしなければ、十月には何らかの厳しい報告が書かれる可能性があった。米園の圧力での改革であること、あからさまにしない形での人民元改革は、八月が改

していても、円の対ドルした状態に保ちつつ、短期的にはある程度の変動を許すという為替制度である。BBCに近い為替制度を採用している国として、アジアではシンガポールとタイを挙げる。これによって輸出競争力が安定する一方、貿易相手国の通貨の国内的な変化に対しては自動的に追随していく効果がある。